



氣比神社

古事記の舞台を歩く ②

三浦佑之

敦賀

北陸本線の敦賀駅から北へ一〇分ほど歩くと赤い巨大な鳥居があり、木々の繁った境内を奥に進むと、あざやかな朱色に塗られた拜殿の前に出る。越前国一宮として長い歴史をもつ氣比神社である。祀られているのは伊弉沙別命、またの名を筒飯大神とも御食津大神ともいう。ケヒやミケの「け」は食べ物をさす語で（ケヒの「ひ」は神霊をさす接尾辞）、ここが山や海の幸に恵まれた豊かな土地であったことを窺わせる。神社から北へ数百メートル行けば港に出るが、古代にはもつと神社の近くまで浜が迫っていたはずだ。

社殿の西北には天筒山てんとうやまという円錐形のきれいな山があり、神社の由緒書によれば、大神は「天筒の嶺に靈跡を垂れ境内の聖地（現在の土公）に降臨した」と伝える。誰が見てもさもありなんとと思う山である。また西へ二キロほど歩くと、有名な氣比の松原に到る。東半分が港と工業地帯として開発されて往時の半分以下になってしまったが、今も白砂青松の名所で、南北に細長く延びた敦賀湾の最奥分に位置している。

古事記には、この白い砂浜の端から端までイルカが並び、その血で浜は真っ赤に染まったとある。中巻に出てくる伝承だが、大臣である建内宿禰たけうちすくねは、オキナガタラシヒメが新羅しんらの国の遠征からもどつて生んだ子を連れ、襦つぬがぎをしに角鹿へ出かける。

その角鹿に仮り宮を作り御子を籠もらせていると、その地に坐すイザサワケの大神が御子の夢に現れ、名を替えようと言う。御子が喜ぶと、夜明けに浜に行けば名を替えた祝いの品があると神は言う。朝、浜に降



気比の松原

りると、鼻先を傷つけたイルカが、浦の端から端まで満ちていた。その神を称えてミケツ大神と名付けた。またイルカの流した血が臭かったので、血浦ちぬらと名付けたが、今は訛ちがつて都奴賀と呼ぶ。

ホムダワケ(後の応神天皇)にまつわるエピソードで、理解しにくい点の多い伝承だが、ケヒ(ミケツ)の大神が、豊かな海の幸を寄せてくれる神だということはよくわかる。そして、奥の深い敦賀湾を眺めていると、この湾に迷い込んでしまったら、たとえ元気なイルカでも

方向感覚を狂わせて浜に乗り上げてしまいうに違いないと思う。古代の人びとにとって、そうして得たイルカは、神がもたらしてくれる幸だった。

また、敦賀の海は異界から神の寄りつくところだった。古事記には出てこないが、日本書紀によれば、ミマキの天皇(崇神)の時代、額に角が生えた人が船に乗って筍飯けひの浦に泊まった。それで、そこを角鹿と呼ぶところ。どこから来たかと問うと、意富加羅おほからの国(朝鮮半島にあった金官国)の王子ツヌガアラシトだと答えた(垂仁紀元年十月条別伝)。

今、気比神宮の摂社として境内の一角を占める角鹿神社には、ツヌガアラシトが祀られている。日本書紀には王子とあるが、海のかなたから寄り来る来訪神として信仰されていたはずだ。そして興味深いのは、日本書紀の記事にはツヌガアラシトの渡来経路が伝えられていることで、朝鮮半島から穴門あなと(関門海峡周辺)に着き、北の海(日本海)を通過して出雲から敦賀に来たという。朝鮮半島と日本列島との交流が日本海を通して行われていたこと、その拠点の一つが出雲であり敦賀であつたということを証明する記事である。

おそらく縄文時代からずっと、この道は人や物を運び続けた海の道であつた。そして要の湊である敦賀に水揚げされた渡来品や海産物は陸路で南下して琵琶湖北端の塩津に運ばれ、ふたたび船に載せられると南へ向かった。その道筋も、「この蟹やいづくの蟹」で始まる、古事記に載せられたホムダワケの長編歌謡によって窺うことができる。古代にも越前蟹は都へと運ばれ、

人びとはその味に舌鼓を打っていた。それにしてもホムダワケは敦賀と縁が深い。それゆえ、ホムダワケの五世孫だと主張するヲホド(継体天皇)が越前から出たというのもうなずける。



越前蟹

下記教室にて三浦佑之先生の
一日講座を実施します。

青山教室

講座名: 古事記の舞台を歩く②～敦賀～
日時: 10/5(金) 13:00～15:00
受講料: 会員3,150円 一般3,780円
講座のお申込・お問い合わせは青山教室へ
(TEL: 03-3475-1151)

町田教室

講座名: 出雲神話の世界
日程: 11/9(金) 13:30～15:30
受講料: 会員2,835円 一般3,150円
講座のお申込・お問い合わせは町田教室へ
(TEL: 042-726-0112)

梅田教室

講座名: 古事記～ヤマトのものがたりを中心に～
日程: 12/1(土) 13:30～15:30
受講料: 会員3,150円 一般3,465円
講座のお申込・お問い合わせは梅田教室へ
(TEL: 06-6367-0880)

三浦佑之 みうら すけゆき

1946年、三重県生まれ。国文学者(古代文学・伝承文学)。成城大学大学院博士課程単位取得修了。千葉大学教授を経て、現在、立正大学教授。近著は「古事記を旅する」(文春文庫)、「古事記を読みなおす」(ちくま新書)、「あらすじで読み解く古事記神話」(文藝春秋)がある。

